

カルロス・フエンテスの「二つのアメリカ」 その時代・他者・歴史とウクロニア

石井 登

はじめに¹

カルロス・フエンテスの「二つのアメリカ」(Las dos Américas)は1993年の4月に出版された『オレンジの樹、あるいは時の円環』(*El naranjo, o los círculos del tiempo*)、後に『オレンジの樹』(*El naranjo*)と改題された短篇集の中の一編である²。この短篇集は、順に「二つの岸边」(Las dos orillas)、「征服者の息子たち」(Los hijos del conquistador)、「二つのヌマンシア」(Las dos Numancias)、「アポロと娼婦たち」(Apolo y las putas)、そして「二つのアメリカ」の五篇から成り、その最後の作品を本論で扱うこととなる。

カルロス・フエンテスは<時代の齡>(La edad del tiempo)と名付けた小説作品リストを作成していた。これは米国の研究者レイモンド・レスリー・ウィリアムズが指摘しているように、1980年代の中頃にフエンテス自身によって考えだされた、作品の分類表兼執筆計画の様相を持つものである³。その中で『オレンジの樹』は90年代にはリストの最後のパートである<オレンジの樹>(El naranjo)に位置していた。フエンテスは2012年5月にこの世を去ったが、2012年に発表された遺作『バルコニーのフリードリッヒ』(*Federico en su balcón*)で示された<時代の齡>では、『オレンジの樹』は彼の代表作である『我らが大地』(*Terra Nostra*)と共に<創設の時>(Tiempo de fundaciones)へと移動している。この短篇集がかつてフエンテスの作品群の最後に位置していたことは確かであり、現在でも彼の最高傑作と評される『我らが大地』と並ぶ分類に置かれていることから、フエンテスの小説作品の中でも、その特別な位置付けを知ることができるだろう。

また、今回検討する「二つのアメリカ」は、コロンブスの新大陸発見について扱った作品であることは注目に値する。先述のウィリアムズは、『オレンジの樹』について「<時代の齡>のサイクルの最後の作品であるこの本は、五章の小説として、あるいは五篇の短篇として読むことができる。」⁴と述べている。つまり、『オレンジの樹』が短篇集ではあるものの、作品全体を考える視点の重要性について語っているとも考えられるが、「二つのアメリカ」独自の重要性について考察を行うことも必要ではないだろうか。そこでコロンブスの新大陸発見を扱った作品であるということがポイントとなる。米国の著名なラテンア

メリカ文学研究者であるシーモア・メントンは、『オレンジの樹』と同じ1993年に出版した『ラテンアメリカの新しい歴史小説』(*Latin America's New Historical Novel*)で、出版当時より過去十年ほどの「より良い歴史小説」として、その主人公にコロンブス、マゼラン、フェリペ二世、ゴヤなどを挙げており⁵、この作品が新歴史小説の定義に当てはまるであろうことが予想できる⁶。

また、コロンブスの新大陸発見を扱った先行作品の系譜も見られる。アベル・ポッセの『楽園の犬』の翻訳者、鬼塚哲郎は、その訳書の解説の中で、アレホ・カルペンティエルの『ハーブと影』、『楽園の犬』、そしてスティーブン・マーロウの『秘録コロンブス手稿』等を挙げている⁷が、フエンテスの「二つのアメリカ」もまた、この系譜に連なる小説であると考えられ、先行する作品との比較の上でも『オレンジの樹』の五つの短篇の中で特に重要な作品である言えよう。そして、フエンテスの『我らが大地』や『戦い』など、多くの作品に通底する歴史小説的側面で、細部に検討を加えるに値する作品であると考えられることから、この「二つのアメリカ」を取り上げることにしたい。

本論では、主に三つの視点から考察を行っていく。一つは作品とその時代性である。『オレンジの樹』が出版された1993年という時代を考えると、「二つのアメリカ」に描かれた現代の姿を理解することができると思われる。次に語り手である1人称の「私」(＝コロンブス)と他者の関係を考察する。語り手が会うアンティリアの先住民との関わり、そして語り手と日本人との関わりを通じて、この小説から読み取ることができる他者の問題について考察を加えていく。もう一つは作品における「時間と空間」の問題である。コロンブスの時代から現代へと一気に繋がる時空間の錯誤はこの小説の面白さの大きな特徴ではないかと考えられ、この点について、ラテンアメリカの歴史小説における先行研究を参照し、さらにユートピアとウクロニアという言葉を用いて考察を行ってみたい。

「二つのアメリカ」とその時代

『オレンジの樹』とその中の一編である「二つのアメリカ」について、その時代性を考察してみる。この作品の背景を知ることによってなぜコロンブスを扱った作品が書かれたかが理解できるが、一步踏み込んで検討してみたい。

『オレンジの樹』の初版である『オレンジの樹、あるいは時の円環』は1993年4月に出版された。この前年の1992年は、コロンブスの新大陸「発見」から五百年となり、この歴史的大事業の五百周年を記念して、様々なイベント、映画の発表や出版が行われた。その中で、カルロス・フエンテスもまた、イギリスBBCの特別番組として放送され、現在も

英語とスペイン語のビデオやDVDで視聴することができる、『埋められた鏡』(*The Buried Mirror*)の案内役を務めた。そして同名の歴史評論を英語およびスペイン語で出版することになった。「二つのアメリカ」は、『オレンジの樹』の「二つの岸边」など他の短篇と同じようにヨーロッパと新大陸の関係をテーマとして扱っており、出版の時期的にも、歴史評論の『埋められた鏡』と短篇集『オレンジの樹』は並列できる作品に位置づけられると考えられる。

この当時、メキシコでは、新自由主義の政党型ネオ・ポピュリズムの典型と評されるカルロス・サリーナス・デ・ゴルタリ政権による、深刻な経済危機に見舞われる直前の状態にあった。米国のフエンテス研究者であるマアルタン・ヴァン＝デルデンが『カルロス・フエンテス、メキシコ、そしてモダニティ』(*Carlos Fuentes, Mexico, and Modernity*)の中で述べているように、北米自由貿易協定(NAFTA)による自由貿易の影響で、メキシコ経済は米国主導のグローバリズムに飲み込まれるところであった⁸。「二つのアメリカ」で描かれる日本の多国籍企業である「パラダイス INC」は、国際法に遵って、アンティリアを観光地としてそのシステムへ複合的に取り込んで搾取するという形で現れる。象徴的な箇所を引用してみたい。

ノムラとその日本人の弁護士部隊(湾はヨットや帆船、水上飛行機で一杯になった)は私にアンティリアの浜辺をメイジ商会に引き渡させたが、彼らは同時にその開発をアマテラス社に下請けさせ、この会社は順番にホテル群の建設をミナモト・コーポレーションへ譲り渡していて、この会社はリネン類の調達をムラサキ・デザイン、タオル類に関してはミシマ・グループ、化粧品類と石鹸類はイチカワ・グループと契約していた。レストランはカワバタ・エージェンシー、ディスコはタニザキ・エージェンシーによって運営されることになっていて、料理は輸入品を扱うエンドー・グループと地元産品を扱うオベ・グループが合併した、アクタガワ社によって用意されることになり、地元産品は島ではミゾグチ会によって処理され、クロサワ運輸によってホテルへ運ばれることになっていて、そのすべてが現地の従業員によってもたらされる。⁹

まるで、日本企業の勢いを示すかのように、アンティリアの島々の経済を複合的に支配する状況が一気に描かれているが、この寓意的な姿は、フエンテスによるグローバリズム批判の一環であると考えられる¹⁰。また、1980年代より米国内では、日本との間の貿易不均衡という視点から、批判が盛んに行われていた。いわゆるジャパン・バッシングである。日本による経済的グローバリズムでの優勢に見られる脅威を、作品中で「パラダイス INC」として登場させたのではないかと見られる。

さらに、ここで描かれるグローバリズムの主導者は日本であるが、恐らく、これは直接的な日本批判とは言えないだろう¹¹。その鍵は、作品のタイトルである「二つのアメリカ」という言葉に見出すことができる。一般に「二つのアメリカ」とは、アングロアメリカとラテンアメリカの二つの地域を指すときに使われる言葉である。作品中では米国が描かれることはないが、日本の企業に浸食される米国は、ジャパン・バッシングを通して、日本を排除する行動を示した。一方の米国はラテンアメリカの国々に対して、グローバリズムの名の下に、経済的な支配を行っている。この作品で、世界のグローバリズムを主導する米国が直接登場するのではなく、日本が登場し、島々を支配する姿が描かれている理由はこの点にある。これはフエンテス流の一種のアイロニーとなっているのだ。

「二つのアメリカ」で描かれるテーマの一つとなるフエンテスのグローバリズム批判としての側面はこのように読み解くことができる。コロンブス新大陸「発見」は、政治、経済、文化の全体でヨーロッパが新大陸を飲み込んだ最初のグローバリズムと捉えることもできるが、フエンテスはこの「発見」から、現代のグローバリズムまでを、時間の錯誤を用いてダイナミックに描き、フィクションとしての面白さを引き出している。また、この作品ではグローバリズムに対する批判的スタンスが、「発見」五百周年の時代背景と絡んで、タイムリーな魅力を持つ結果となっていると言えるだろう¹²。

作品における語り手と他者の関係

ここでは、語り手である「私」(＝コロンブス)と他者との関係について、作品中での言葉の利用という点を手掛かりに考察を加えてみたい。

この短篇の中で、コロンブスは、彼が一人でたどり着いたパラダイスで先住民と出会い、共に生活することになる。しかし、彼の振る舞いは観察者の立場であるという印象を受ける。先住民と会話を交わすことはなく、ただ彼らがどのような生活を行っているかを日記の中に記述するのみである。この語り手のスタンスの理由を知るヒントは、『オレンジの樹』の第一の短篇である「二つの岸边」の中に見ることができる。

この「二つの岸边」では、ユカタンで先住民と共に生活しているところを発見されたことから、エルナン・コルテスのメキシコ征服に関わり、征服者と先住民の間で通訳の仕事をしていた実在の人物であるヘロニモ・デ・アギラルという語り手が登場する。彼は作品中ではすでに死んでしまっているが、死者の視点から、現実と異なる歴史について語っていくことになる。彼はその語りの中でマリンチェについて取り上げる。マリンチェは先住民の王の娘であった。他部族の奴隷になっていたところ、コルテスへの献上品として捧げ

られ、その語学習得能力の高さからコルテスの通訳として活躍した。後にコルテスとの間に混血の子供を産み、後世に渡って裏切り者の比喻として、憎悪の対象となった実在の人物である。ゴンサロ・セロリオは、征服者たちが征服したことで、マリンチェも彼らの言葉を得たと指摘し、フエンテスの彼女に対する視点を評価している¹³。この言葉の獲得に関する視点は「二つのアメリカ」における語り手の振る舞いの理由を知る手掛かりになると思われる。

語り手は先住民によって「アンティリア」¹⁴と呼ばれる島の名前や、「アマカ（ハンモック）」という物の名前のような、わずかな言葉しか獲得せず、彼自身のヨーロッパの話を先住民が理解しないからといって、押し付けることも無く暮らしている。シェイクスピアの『テンペスト』での、プロスペローとキャリバンの関係はよく知られているが、「二つのアメリカ」での語り手コロンブスと先住民との関係は、言葉によるものではない、逆説的なパロディとなっているのである。奴隷のキャリバンは「おれにことばを教えた罰だ」¹⁵と叫ぶが、「二つのアメリカ」の語り手と先住民の間には、言葉を教える罪も教えられる罰もなく、語り手は観察者としてのみ、先住民と関わっていくことになる。

一方、語り手と日本人たちとの関係は、先住民の場合とは異なっている。「パラダイスINC」の一員として、饒舌なノムラと日本人たちに僅かに反感は抱きつつも、彼らと会話し、関わりながら、自らが持ってきた種を植えたオレンジ畑の管理者として、白い家で安楽な生活を続ける。しかし、コロンブスは、ウーテ・ピンカーネイルというドイツから来た女性の〈言葉と身振り〉¹⁶によって、人間の経済活動が原因で汚染された現実の世界を知るやいなや、日本人たちによって排除され、スペインへと帰っていくことになる。これは征服者であったはずのコロンブスもまた、結局は日本人たちにとっては異質な他者となったことを示しており、言葉による関わりが罪と罰を生んだと捉えることができるだろう。ここに、言葉の使用を軸にした時間的経過とともに、他者へと変化する語り手の姿を見ることができる。

この変化については、ミハイル・バフチンが『小説における時間と時空間の諸形式』の中で「変身」について行う考察を参照することで理解することが可能である。バフチンは昔話の人間像を「変身と同一性」と捉えているが、そこで論じられている「変身のアイデア」を、先の「言葉の使用を軸にした時間的経過」の中に読み取ることができるのではないだろうか。バフチンは、ヘシオドスの『仕事と日』と『神統記』から得た、時間の系列についての五つの時代（黄金の時代、白銀の時代、青銅の時代、トロイアの時代、鉄の時代）について述べている¹⁷が、奇しくも、「二つのアメリカ」の中には「黄金時代」や「鉄の時代」という言葉が現れる¹⁸。そしてバフチンの指摘する、「人がいかにして他者になるか

を描く類型」¹⁹が、この作品で描かれていると言えるだろう。関係に言葉を用いない観察者として主観的な立場で先住民の中にいた語り手は、言葉を用いる日本人との関係を経て、その人生における役割を「危機的に急変」²⁰し、結果として排除され、スペインへ戻ることになるのである。

時間と空間

ここで、「二つのアメリカ」における時空間について考察してみたい。この「二つのアメリカ」は、コロンブスを扱った小説の系譜に連なると先に述べた。この系譜を綴った鬼塚は小説作品としてカルペンティエルの『ハーブと影』、ポッセの『楽園の犬』、マーロウの『秘録コロンブス手稿』を挙げている。これらはいずれもメタフィクション的であるが、歴史的な時間の経過を残し、主人公の空間的な移動が明確に描かれている。そのため、作品の読みにおける時空間の分析的手法は有効性を持つと考えられる。一方、「二つのアメリカ」は、語り手のコロンブスがアンティリアにたどり着いたところから始まり、イベリア航空の飛行機でアンティリアを去り、スペインへ戻る帰路の機内で終わる。また、この作品が日付のない日記の断片であり、その日記中に過去の回想が挟まれ、特定の場所と日付については8月3日のスペインのバラ・デ・サルテス、9月6日のカナリア諸島のゴメラ程度であり、それ以外は特定されず、時代錯誤も起こっていることから、一般的な時空間の分析的手法は有効ではないと思われる。そこで、新歴史小説的側面と反歴史小説的側面について考えてみたい。

先述のメントンの『ラテンアメリカの新しい歴史小説』は、ラテンアメリカの小説の特徴を考える上で、一つの鍵となる研究書である。新歴史小説については、メントンを踏まえて、野谷文昭がそのポイントについて簡潔にまとめているので引用してみたい。

メントンの言う「新しい歴史小説」とは何を指すのか。それがロマン主義的小説の枠を壊すものであることは言うまでもないが、いくつかの特徴を挙げるならば、壁画的な全体的視野、豊かなエロティシズム、複雑なネオバロック的（ただし難解ではない）構造と言語の実験であり、つまるところ「ブーム」の小説が示した特徴と共通している。²¹

また、この『ラテンアメリカの新しい歴史小説』では、新歴史小説の特徴として、次の6つの項目を挙げている。以下に列挙してみる。

- 1, ボルヘスによって知られるようになった、過去・現在・未来のすべての時間的区切りに適用でき、その3つの哲学的アイデアを例証するのに、歴史的時間を用いて模倣的に再創造することに関わる、様々な段階での下位的配置。
- 2, 省略、誇張、時代錯誤を通じて歴史を優雅に歪曲すること。
- 3, 主人公として有名な歴史上の人物を利用すること。
- 4, メタフィクション、または語り手が彼自身のテキストの創作過程について言及しているもの。
- 5, 間テキスト性。
- 6, 対話、カーニバル、パロディや異書記法といったバフチンの概念。²² (斜体原文)

これらの特徴は、すべて揃う必要はないとメントンは述べているが、いずれも「二つのアメリカ」の中に発見することができる。それぞれを列挙してみたい。

- 1, 歴史の反復。コロンブスの時代のティレニア海の港々にあふれる汚物の類いと、ウーテ・ピンカーネイルが語る世界での汚物の類いがそれにあたる。
- 2, コロンブスの時代（1492年）と、水上飛行機で現れる日本人（現代）の間の時代錯誤。
- 3, この作品の語り手であり主人公はコロンブスである。
- 4, 日記の中での、読者への語りかけ。
- 5, もちろんコロンブス小説の系譜から、多くの間テキスト性を見出すことができるが、特にコロンブスが亡命ユダヤ人であるという設定や、世界を乳房の形として考えていたことなどは、サルバドル・デ・マダリアーガの『マダリアーガ コロンブス正伝』に記述されており、「二つのアメリカ」との間に強い関連が考えられる。
- 6, 例えば、「パラダイス INC」に連なる、企業の名前の列挙。ノムラは、恐らく『ハウス・オブ・ノムラ』から採られたものであろうし、アマテラス、アクタガワ、クロサワなどの名前が挙げられるが、これらは一種のパロディと考えられる。²³

このように、メントンの示した新歴史小説的特徴が「二つのアメリカ」からかなり明確に読み取ることができる。彼はフエンテスの新歴史小説として、『我らが大地』、『古いぼれグリンゴ』、そして『戦い』を挙げているが、「二つのアメリカ」はこれらに続くフエンテスの新歴史小説的作品と言ってよいだろう。また、歴史小説としての枠組みから、筆者は2と3の特徴が特に重要であると考え、二つのアメリカは、とりわけ時代錯誤的な時間についての描き方が独特であると思われる。この時間の描き方について、フエンテスの代表作『アウラ』について行われた研究を利用し、反歴史小説的側面についても考察してみたい。

メキシコの研究者、ヘオルヒーナ・ガルシア＝グティエレスは、フエンテスの『アウラ』の研究の中で、この言葉を用い分析を行っている²⁴。この中篇の主人公である歴史家のフェリペは、メキシコ市中心部のドンセレス通りにある老婆コンスエロの家に入り、彼女とその夫であるリョレンテの関係を手記の中に読みながら、自身も歴史的な時間の流れから離れてしまう。異なる時代の人間であったコンスエロと結ばれることによって、人間と時間の関係を克服する。ここでドンセレスの屋敷は閉じた時間と空間の中に存在し、時間の流れを混乱させるタイムマシンのような働きをしていると考えられる。そして、「二つのアメリカ」におけるアンティリアも、ドンセレスの屋敷のような働きをしていると言えよう。そのため、「1492年」のコロンブスがたどり着いた「黄金時代」のアンティリアに科学技術を持った「現代」の日本人が飛来することになる。この歴史を無視した時代錯誤は、新歴史小説の側面を有すると同時に、その時空間的特質から反歴史小説の側面も持つものとなっている。そこで、このようなあり得ない時間を示す言葉として、「ウクロニア」という言葉を用いて、さらに検討を加えてみたい。

ウクロニア的小説

ここでは、ユートピアから派生した語と考えられるウクロニアという言葉について検討し、「二つのアメリカ」におけるウクロニア小説としての特質について考察してみたい。はじめにユートピアという言葉について、その定義に触れてみよう。この言葉とその研究は膨大であるため、ここでは語源のみに触れ、定義してみると次のように「ou（どこにもない）topos（場所）」または「eu（よい）topos（場所）」という意味になる。本論では「どこにもないよい場所」をユートピアの定義として、ウクロニアについて考えることにしたい。その基本的な意味はユートピアという言葉の「トポス」の部分で、時間を意味する「クロノス」に替え、その概念を時間に適用した、「何時でもないよい時間」と言えるだろう。

ウクロニアという語はまずフランス語の中に見つけることができる。フランス、ガリマール社の『トレゾール・デ・ラ・ラング・フランセーズ』（1994年）に *Uchronie* という言葉がある。これが本論でのウクロニアに当たる語で、その意味は次の通り、1、存在し得たが存在しなかったような、思考の中で繰り返される歴史。2、フィクション的な時代。時間における空想上の喚起、のような意味となる。この辞典ではこの言葉が1876年に用いられたとされているが、これはフランスのシャルル・ベルナール・ルヌヴィエが *Uchronie* を出版した年である。さらに、この1876年に出版されたものは第二版で、初版は1857年となっている。なかったがかったかもしれないヨーロッパの歴史を描いたヨーロッパ発展の歴

史を描いたテキストである。

では、スペイン語におけるこのウクロニア (ucronía) という言葉の起源はどうなっているであろうか。実は、スペイン語の辞典にこの語が採用されたのは比較的最近である。筆者が調べたところでは、この語は1992年にスペイン語の辞典に現れる。スペイン語の権威であるスペイン王立アカデミー (Real Academia Española) が出版している *Diccionario de la lengua española* の各版を遡ってみると、最新の版である2001年版では当然見つけることができるが、この版の前の1992年版でも ucronía を発見することができる。しかし、その前の版である1984年版では、この語は見つからない。また、その前の1970年版でも同様である。つまり、王立アカデミーが ucronía をスペイン語の語彙と認めたのは1992年の版からであり、スペイン語の中では比較的新しい言葉であるということができよう。辞書における ucronía の意味は、「起こる可能性があったが、当然起こらなかった出来事が歴史に適用された論理的再構成」とされる。メキシコの作家・哲学者のオスカル・デ・ラ・ボルボリャは『ウクロニアス』 (*Ucronías*) という書を発表しているが、1985年よりメキシコの新聞『エクセルシオール』に連載されたフィクションの新聞記事をまとめたものである。恐らく、『ウクロニアス』は、ウクロニアという言葉がスペイン語にも導入される大きな要因になったものと思われる。

我が国では、1988年の『ユリイカ』において、檜山哲彦が「ウクロニア物語」という記事を発表しており、そこでは、ウクロニアとはユートピアを時間に適用したものと捉えている。さらに、沼野充義は、その著書『徹夜の塊ユートピア文学論』において、「ユークロニア」という言葉を用い、その出現理由について述べている。

トマス・モアによる「ユートピア」という造語は [中略] 「どこにもない場所」だというわけだ。しかし、この地球上のほとんどすべての土地が探索されてしまっている現代において、「どこにもない場所」理想郷があるなどと空想するのはあまりにも馬鹿げている。だから現代人にとって理想郷とは、「ない場所」の中ではなく、「ない時間」の中に求められなければならない。 [中略] 二十世紀の大きな物語は、「ユートピア」(ない場所) ならぬ、「ユークロニア」(ない時間) をめぐるものだったと言ってもいいだろう。²⁵

この箇所では指摘されているように、ウクロニア (ユークロニア) が、現代文学の鍵になる用語として、前世紀の終わりより特に重要性を増しつつあることがわかるだろう。

「二つのアメリカ」では、コロンブスが日記に書き、日本人たちが語るように、アンティリアはまずユートピア的特質である「どこにもない良い土地」として、コロンブスの到着から日本人たちが現れるまでの間、彼の望んだ土地としてのユートピア的な姿を見せて

いた。同じくウクロニア的特質から、ユートピアを時間に適用したものである「あり得ない時間」として、アンティリアは先住民たちの生きる黄金時代に、中世のコロンブスの時代に、日本人が飛行機で到来する現代という時代に同時に存在していたのである。日本人の到着後、アンティリアが誰でも訪れることができる観光地となり、時空間的特徴が大きく変化するのも、空間のユートピア的特質及び時間のウクロニア的特質を失ってしまったためであると考えられる。これは閉じたタイムマシンの時空間の特質、つまり反歴史的状況が崩れることを意味するが、むしろ、ここから読み取れるのは、ユートピアがユートピアであるために、ウクロニア的特徴が求められること、つまり、どこにもない理想の時空間としての調和が必要であるということである。

おわりに

このように「二つのアメリカ」について検討してきたが、社会批判的なテーマを持ちつつも、時空間についての文学的表現の深さとその面白さはフエンテスの作品の真骨頂であると言えるだろう。コロンブスに関する先行作品や研究をパロディとしてうまく取り込み、読みの多様性へと導くとともに、彼独自の歴史的時間に対する姿勢の一片も垣間見ることができるのではないだろうか。さらには、この作品が書かれた時代に注目されることになった新しい概念であるウクロニアという時間の捉え方をも盛り込んだ、彼の短篇における代表作の一つと考えるべきであろう。ラテンアメリカを代表する作家として、このような力量を見せたカルロス・フエンテスが2012年5月15日にこの世を去ったのは、非常に残念なことである。

注

¹ 本論文は2008年に長崎外国語大学で行われた日本イスペインヤ学会大会における、筆者による発表「カルロス・フエンテスの *Las dos Américas* における時空間」に基づくものである。論文の本文中において用いられた人名については敬称を省略する。

² この作品はコロンブスによる日記の断片という体裁を取って語られる。文中でのクリストバル・コロンの名前については、基本的に我が国での一般的な名称であるコロンブスを用いる。また、*El naranjo, o los círculos del tiempo* のタイトルについては、『オレンジの樹、あるいは時の円環』と『オレンジの樹』の双方が使用されるが、同じものと考えて構わない。

³ Williams, *The writings of Carlos Fuentes*, p. 110. “Sincethe mid- 1980s, Fuentes himself has conceptualizad his total fiction in fouteen cycles titled “La Edad del Tiempo,” この評論が書かれた1996年の時点では、『オレンジの樹、または時の円環』は<時代の齡>のリストの中で最後に位置付けられていた。

⁴ 同, p. 134: “The final work in the cycle of “La Edad del Tiempo,” this book can be read as a five-chapter novel or a volume of five short stories.”

⁵ Menton. *Latin America's New Historical Novel*. p.23. “the protagonists of some of the better historical novels of the past decade are Christopher Columbus, Magellan...”

⁶ 同年の出版であるが、『ラテンアメリカの新しい歴史小説』では、『オレンジの樹』は取り上げられていない。

⁷ 鬼塚.『楽園の犬』p.368.

⁸ Van Delden. *Carlos Fuentes, Mexico, And Modernity*. pp.197-199.

⁹ Fuentes. ‘Las dos Américas.’ en *El naranjo, o los círculos del tiempo*. p.247. “Nomura y su ejército de abogados japoneses (el golfo se llenó de yates, queches e hidroplanos) me hicieron ceder las playas de Antilia a la compañía Meiji quien a su vez subcontrató su desarrollo a la Compañía Amaterasu, la cual en su turno cedía la construcción de hoteles a la Corporación Minamoto que contrataba la compra de mantelería con los Diseños Murasaki, todo lo relativo a toallas con el Grupo Mishima y la perfumería y jabonería con el Grupo Ichikawa. Los restaurantes serían dirigidos por la Agencia Kawabata y las discotecas por la Agencia Tanizaki, en tanto que las cocinas serían provistas por Akutagawa Asociados, en fusión con el Grupo Endo para el producto importado y con el grupo Obe para el producto nativo, que sería procesado en la isla por la Corporación Mizoguchi y trasladado a los hoteles por los Transportes Kurosawa, todo ello procurado por empleados locales...”

¹⁰ 『オレンジの樹』を発表後の1994年、北米自由貿易協定 (NAFTA, スペイン語で TLC) に端を発したメキシコ、チアパス州でのサパティスタ蜂起について、当時のフエンテスは支持を表明している。やはりグローバリズム批判の側面からの行動と思われる。

¹¹ Hopenhayn. *El naranjo. Edición especial*. p.54. ホーペンハインは「二つのアメリカ」の日本人は日本人ではなく、ヤンキーの夢だと述べている。

¹² このグローバリズム批判の側面とそのテーマの重要性については東京大学教授の野谷文昭先生より大変参考になる示唆を頂いた。また、「二つのアメリカ」というタイトルに秘められた、作品のテーマについての視点は清泉女子大学教授の杉山晃先生よりご指摘を頂いた。この場を借りてお礼を申し上げます。

¹³ Celorio. *El naranjo. Edición especial*. pp.21-22.

¹⁴ この小説で描かれているのは Antilia であり、実在するアンティル諸島 Antillas ではない。

¹⁵ Shakespeare. ‘The Tempest.’ *William Shakespeare The Complete Works. 2-ed.* p.1227. 原文では‘The red plague rid you for learning me your language!’であり、「俺にお前の言葉を教えるのと引き換えに赤い疫病がお前を滅ぼす」のような意味。邦訳『テンペスト』の「罰」に当たる単語は見受けられないが、意味合いから読み取ることができる。ここでは敢えて訳書の文を用いたい。

¹⁶ Fuentes. *El naranjo, o los círculo del tiempo*. p.250. <言葉と身振り> (verbal y gestual) という言葉は、本論のように、言葉による関係から捉えると大変印象的な箇所である。

¹⁷ バフチン「小説における時間と時空間の諸形式」『ミハイル・バフチン全著作第5巻』p.189.

¹⁸ Fuentes. *El naranjo, o los círculo del tiempo*. p.236.

¹⁹ バフチン「小説における時間と時空間の諸形式」『ミハイル・バフチン全著作第5巻』p.191.

²⁰ 同. p.191.

²¹ 野谷「ロペ・デ・アギーレの表象をめぐって」『れにくさ』第3号. p.79.

²² Menton. *Latin American New Historical Novels*. pp.22-24.

²³ それぞれ、作品中の次の頁に記述されている。

1, ティレニア海については p.230. 現代については p.250. に描かれている。

2, p.232. にハンザ同盟やスペインのカトリック両王、フェルナンドとイサベルの名称が見られる。さらにポルトガルのセバスチアンの話題が挙がる (p.237.) が、16世紀の話題と考えられ、ここでも時代錯誤が起こっていると思われる。

3, 例えば pp.246-247. で日本人たちはコロンブスの名を呼ぶ。

4, p.232. や p.240. などて日記の読者 (el lector) に向けて話しかけている。

5, 「二つのアメリカ」の地球乳房説は p.231. に述べられる。一方、マダリアーガの論では、p.403.

に同様の記述が見られる。

6, 先の p.247. の引用箇所。『ハウス・オブ・ノムラ』については、野谷先生よりご指摘頂いた。

²⁴ García Gutiérrez. *Los disfraces*. pp.146-148.

²⁵ 沼野「大きな物語の解体」『徹夜の塊 ユートピア文学論』 p.240. なお、この著書の出版は2003年であるが、論の初出は1997年である。

参考文献

- 鬼塚哲郎. 「解説」『楽園の犬』 現代企画室 1992.
- 沼野充義. 『徹夜の塊 ユートピア文学論』 作品社 2003.
- 野谷文昭. 「ロペ・デ・アギーレの表象をめぐって」『現代文芸論研究室論集 れにくさ』 第3号 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室 2011. pp.78-91.
- バフチン、ミハイル. 「小説における時間と時空間の諸形式」『ミハイル・バフチン全著作【第五巻】』 伊東一郎、北岡誠司他訳 水声社 2001.
- 檜山哲彦. 「ウクロニア物語—ミヒャエル・エンデの語り」、『ユリイカ』 20巻6号 青土社 1988. pp.114-120.
- マーロウ、スティーヴン. 『秘録 コロンブス手稿 上』 増田義郎訳 文藝春秋社 1991. 『秘録 コロンブス手稿 下』 増田義郎訳 文藝春秋社 1991.
- Borbolla, Óscar de la. *Ucronías*. México: Joaquín Mortiz, 1990.
- Carpentier, Alejo. *El arpa y la sombra*. en *Obras completas de Alejo Carpentier IV (2ed)*. México: Siglo XXI editores. 1986. pp.215-378. 邦訳: A・カルペンティエール (牛島信明訳) 『ハーブと影』 新潮社. 1984.
- Celorio, Gonzalo. *El naranjo. Edición especial*. México: Alfaguara, 1994. pp.17-26.
- Fuentes, Carlos. *El naranjo, o los círculos del tiempo. (1ed)*. México: Alfaguara. 1993. *El naranjo. (11re-imp)*. México: Alfaguara, 1997.
- García Gutiérrez, Georgina. *Los disfraces: La obra mestiza de Carlos Fuentes*. México: El Colegio de México. 1981.
- Centre National de la Recherche Scientifique. *Trésor de la Langue Française*. Paris: Gallimard. 1994.
- Hopenhayn, Martín. *El naranjo. Edición especial*. México: Alfaguara. 1994. pp.45-55.
- Madariaga, Salvador de, *Vida del muy magnífico Señor Don Cristóbal Colón*. Buenos Aires: Editorial sudamericana. (1ed. 1940, 10ma-ed. 1991). 邦訳: サルバドール・デ・マダリアーガ (増田義郎・斎藤文子訳) 『マダリアーガ コロンブス正伝』 角川書店. 1993.
- Menton, Seymour. *Latin America's New Historical Novel*. Austin: University of Texas Press. 1993.
- Posse, Abel. *Los perros del paraíso. (4ª-imp)*. Buenos Aires: Emecé. 1991. 邦訳: アベル・ポッセ (鬼塚哲郎・木村栄一訳) 『楽園の犬』 現代企画室. 1992.
- Real Academia Española. *Diccionario de la Lengua Española*. Madrid: 1970. . *Diccionario de la Lengua Española*. Madrid: 1984. . *Diccionario de la Lengua Española*. Madrid: 1992. . *Diccionario de la Lengua Española*. Madrid: Espasa Calpe. 2001.
- Renouvier, Charles. *Uchronie (L'utopie dans l'histoire)*. Paris: Fayard. 1988.
- Shakespeare, William. 'The Tempest.' *William Shakespeare The Complete Works. (2-ed)*. New York: Oxford University Press. 2005. pp.1223-1243. 邦訳: シェイクスピア (小田島雄志訳)

- 『テンペスト』 白水社. 1983.
- Van Delden, Maarten. *Carlos Fuentes, Mexico, And Modernity*. Nashville: Vanderbilt University Press. 1998.
- Williams, Raymond Leslie. *The Writings of Carlos Fuentes*. Austin: University of Texas Press. 1996.

‘Las dos Américas’ de Carlos Fuentes

Su época, la otredad, la historia y la ucronía

ISHII Noboru

‘Las dos Américas’ es uno de los cuentos de *El naranjo, o los círculos del tiempo*, publicado en 1993, y parece que este libro es uno de los más importantes escritos por Carlos Fuentes (1928-2012). Así como *El arpa y la sombra* de Alejo Carpentier, *Los perros del paraíso* de Abel Posse y *The Memoirs of Christopher Columbus* de Stephen Marlowe forman una genealogía de novelas sobre Cristóbal Colón, ‘Las dos Américas’ se clasifica de esta forma. En este cuento, Cristóbal Colón, el narrador, llega a una isla del Nuevo Mundo, se halla con un pueblo, que vive en la época de oro, y decide no regresar a Europa y vivir con ellos. De repente, aparecen los japoneses de nuestra época y exigen que Colón mantenga la empresa japonesa. Él vive tranquilo cultivando naranjas, pero una mujer alemana le habla del mundo actual, que está lleno de seis mil millones de seres, contaminado, donde no se puede proseguir ya con esta situación. Cuando Colón sabe sobre el mundo verdadero, los japoneses expulsan a Colón de las islas de Antilia. Al fin Colón regresa a España después de quinientos años de ausencia.

En este artículo consideramos el cuento de Carlos Fuentes usando tres recursos. Razonamos que el cuento relaciona tanto la época del quinto centenario del descubrimiento por Cristóbal Colón como la de que México recibía la influencia del Tratado de Libre Comercio de América del Norte. Podemos leer el cuento desde el punto de vista crítico sobre la globalización. Después discutimos sobre la otredad en la que podemos leerlo por la idea de metamorfosis de Mijaíl Bajtín, porque la manera de la comunicación verbal de Colón se transforma desde el pueblo de Antilia hasta los japoneses. Aquí comprendemos que él se metamorfosea en el ser del otro (otredad). Por último miramos el prisma del tiempo y el espacio históricos, y profundizamos nuestra lectura a través de la idea de la utopía y la ucronía que es una palabra de neologismo.

Concluimos que ‘Las dos Américas’, que comporta muchos libros antecedentes, varias ideas de la historia, y también algunas ideas de la utopía y la ucronía, nos atrae hacia diversas lecturas profundas.